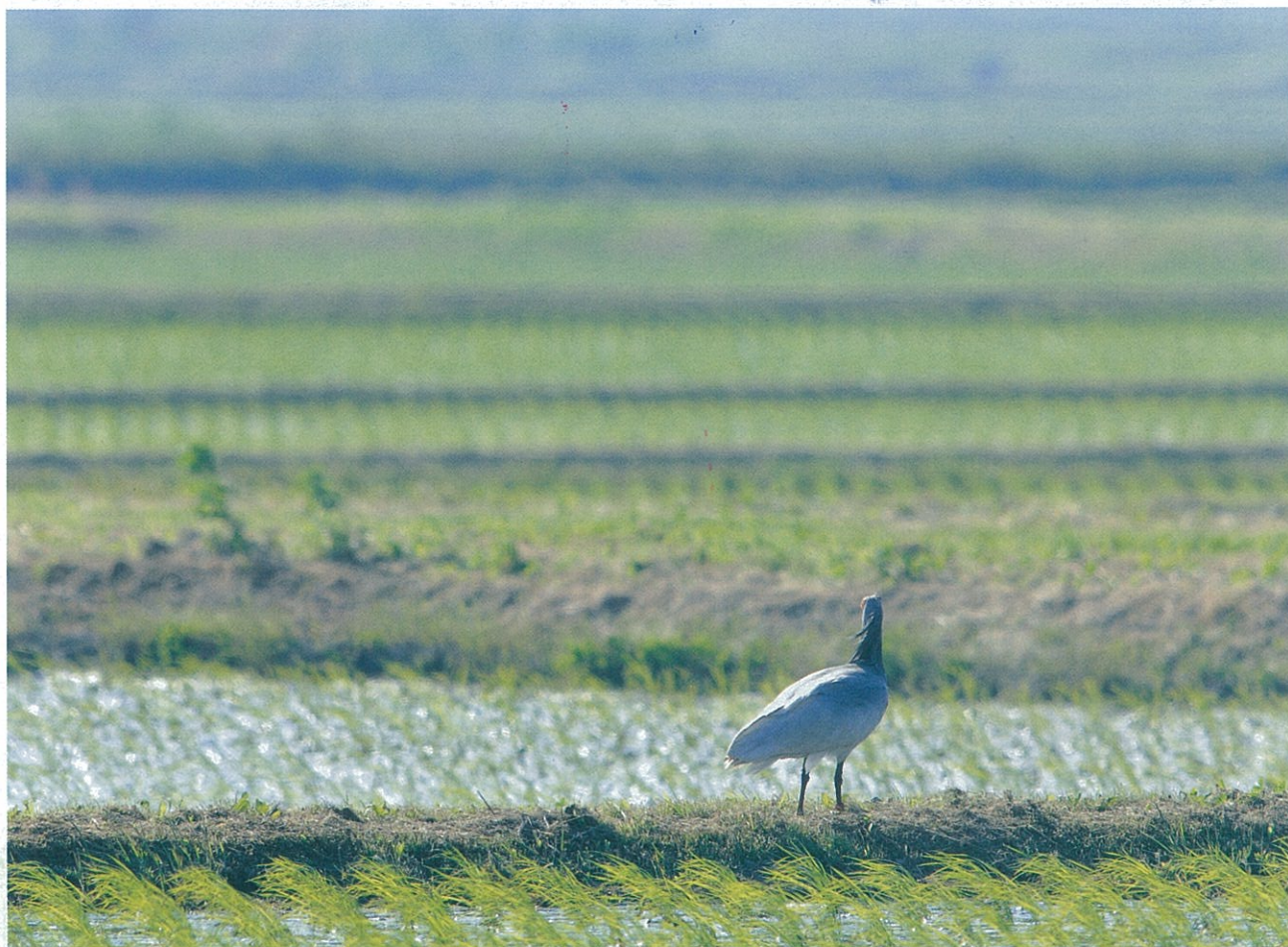




「青嵐に立つ朱鷺」

新潟大学朱鷺・自然再生学研究センター 中津 弘 氏

松 涛

№.29

2013. 3. 10

主な記事

学部長挨拶	2
同窓会長挨拶	3
今年度の活動計画	3
支部だより	4
職場紹介 朝日酒造	9
特集 東日本大震災のその後の取り組み	10
特集 “トキをめぐる” 話題'12	12
ペンリレー 同窓生からのたより	13
農学部フォーラム	15
国際交流	16
同窓会会計報告	17
学部だより	18

学部長挨拶

農学部 部長

新村 末雄



はじめに、農学部同窓会60周年記念事業に農学部の前庭および中庭の復元整備事業を組み入れていただき大変ありがとうございます。平成21年度から行っており、農学部校舎の耐震改修工事、今年度が最後の年となりました。この間、講義には他学部等の講義室を借りなければならず、学部学生には大変ご不便をおかけしました。また、同窓生諸氏にも何かとご不便をおかけしたことを存じます。改修後の校舎は、以前のものと比べものにならない程、明るく、また、機能的な建物になっております。

農学部同窓会60周年記念式典が平成25年6月8日に開催されますが、その折に緑化整備された嵐丘庭の農学部への引き渡しが行われる予定になっております。農学部同窓会60周年記念式典には多くの卒業生にお集まりいただき、改修工事が終了した農学部校舎ならびに緑化整備の終了した嵐丘庭を是非ご覧いただきたいと思っております。

国立大学を巡る最近の状況について報告させていただきます。平成24年6月に公表された「大学

改革実行プラン」では、文部科学省が「大学ビジョン」、「国立大学改革基本方針」、「国立大学改革プラン」等を策定し、国立大学改革を推進するとされており、それに向けて全国の国立大学法人では、学部毎に特色・強み・担うべき社会的役割を明確にし、改めてそれぞれの学部のミッションを再定義するという作業に取りかかっているところです。

一方、今年1年を振り返り、農学部の状況を簡単に報告させていただきます。

まず教育面では、平成24年度に「産業界のニーズに対応した教育改善・充実体制整備事業」が文部科学省より採択され、現在実施しているところであり、この事業では、各種のインターンシップを実施し、「農力」の高い人材の育成および学部学生の就業力を養うことを目指しております。この様な就業力育成のための取組および農学部キャリアアフォーラムの開催といった取組の成果で、農学部の就職率は、毎年高く、週刊東洋経済平成24年10月27日特大号「本場に強い大学2012」の就職率ランキングで全国大学の理系ベスト100の45位にランクされました。農学系では、名古屋大学に次いで2位です。また、中部地域では、堂々の13位にランクされております。

また、フィールド科学研究センター佐渡ステーションでは、平成24年度に「教育関係共同利用拠点」の申請が他大学の演習林に先駆けて文部科学省より採択されました。この拠点認定により、日本における自然保護の最先端フィールドである佐渡ステーションを、幅広く全国の大学の森林環境教育に役立てることが可能となりました。

さらに新潟大学では、「朱鷺の島環境再生リーダー養成ユニット」という地域再生人材養成プログラムを平成22年10月から実施しており、この事業にも農学部の先生方が多数参加致しております。平成24年9月には2期生45名の修了生を輩出し、平成24年10月からは3期の新入生66名を自然再生農林業（農業）、自然再生農林業（自然）、トキモニター、エコツアーガイド、環境教育の5コースに迎え、1年間の実習や演習等が開始されております。

また研究面では、平成24年10月刈羽村に「びあパークとうりんぼ」という施設が開所し、包括連携協定を結んでいる刈羽村との共生事業により、その一角に「新潟大学・刈羽村先端農業バイオ研究センター」が設置されました。このセンターには先端機能を有した8機のバイオトロンが設けられており、今後、このセンターを利用した研究の成果が期待されます。

食料問題や地球・地域環境問題が深刻化する近年では、アジア以外の国々の大学とも農学に関する研究交流が盛んになってきております。そ

れに伴って協定校を増やす必要があるとの考えから、平成24年中にナバール大学（スペイン）、寧夏大学農学院（中国）、カセサート大学（タイ）とも交流協定を締結しました。今後さらに、プトラ大学（マレーシア）、ESA（フランス）、タイグエン大学（ベトナム）、内モンゴル農業大学（中国）とそれぞれ交流協定を結ぶべく準備を進めているところです。

また、平成24年7月7日と8日の両日にわたって、第4回農学部国際シンポジウムを中国の東北農業大学で東北農業大学との共催で開催しました。今回のシンポジウムには、新潟大学農学部から50名の教職員、学部学生および大学院生とともに、新潟大学農学部が交流協定を締結している6カ国の8大学から、研究者と学生総勢270名が参加し、アジア地域および世界の農業における地球規模での問題や参加者の地域特有の問題について発表と討議を行いました。今回のシンポジウムには、農学部同窓会から拠出いただいた資金のうち約100万円を開催費補助および農学部教員派遣補助として使用させていただきました。改めて御礼申し上げます。

農学部同窓会には、国際交流活動以外にも広報活動や卒業祝賀会などの諸行事に多大なご支援をいただいております。感謝申し上げます。今後とも、進藤会長をはじめとする農学部同窓会の皆様には、学部のサポートとしてご支援とご協力を賜りますことをお願いし、私の挨拶とさせていただきます。

同窓会長挨拶

同窓会長 進 藤 隆



同窓の皆様におかれましては、ますますご健勝のこととお喜び申し上げます。

「農学部同窓会60周年記念事業」のお願いをいたしましたところ、多くの方々よりご協力をいただいておりますが、まだまだ目標額には達しております。

皆様の一層のご協力をお願い申し上げます。50周年記念事業の際は協賛いただいた方々のご芳名を「松濤」でご紹介しませんが、今回はご協力に感謝してご報告申し上げます。いと考えております。

今回の記念事業は、研究・教育等各分野で農学部が高い評価を得ている教職員や学生に少しでも教育環境をととのえることと学生の同窓会への帰属意識を高めることを目標としております。

「嵐丘庭」の復元には設計段階から学生が関与し、今後数十年同窓会は学生とともに樹木の育成と管理に関わることとなります。

おり、C棟の耐震改修工事が終わりました。旧嵐丘庭(中庭)の施工が行われます。

なお、復元工事につきましては農学部同窓会の「ホームページ」をご覧ください。

また、6月8日(土)の記念式典は、ホームカミングとして4月2日に増築・改修工事が竣工する新潟大学中央図書館「ライブラリーホール」で行います。

ご出席いただく皆様から復元された「嵐丘庭」と現在の「五十嵐キャンパス」を見学いただければ幸いです。

祝賀会は、記念式典終了後「オークラホテル新潟」に移動して開催します。万障お繰り合わせの上、ご参加いただきますようお願い申し上げます。

現在、学生が鋭意努力し社会評価を得て就職率ほぼ100%を達成できるのも有為な人材として活躍している同窓先輩諸兄の賜だと思います。

そんな中で、私は同窓生お二人のお話をお聞きすることができました。

平成23年、首都圏同窓会総会で松田謙氏(19年卒・農芸化学科・農製)の、協和発酵キリンで経営者として研究者として卓越した識見と実践を伺いし、そのご努力に敬服いたしました。

した。

平成24年は、新潟大学産学地域連携推進機構的財産創成センターが学生向けに開催した講演会で荒川弘氏(16回卒・農学科・園芸)の「サカタのタネのこれまでのあゆみと研究開発の現状」と題してお話しされました。

研究者として経営者としての実践を踏まえたお話は学生をはじめとする聴講された人たちに大きな示唆を与えていました。

今回は、たまたま私が巡り会えた

2012年度活動計画

幹事長 箕 口 秀 夫

一事例に過ぎず各分野で多くの同窓の皆様が活躍していることに深甚なる敬意を表します。

学生が同窓生の活躍を目の当たりにしてさらに努力されることを期待します。

最後に、農学部同窓会60周年が同窓の皆様と母校発展の契機となり、記念式典・祝賀会で同窓生の再会と一層の親交の深まることを願って会長の挨拶とします。

2013年に実施する本会60周年記念事業に全力をあげて取り組むとともに農学部同窓会活動の活性化に努めていきます。また、全学同窓会にもこれまで通り協力していきます。

2012年度は、主として以下の活動に取り組めます。

1、「松濤」29号の発刊
より充実した内容を企画して読まれる会誌を目指します。

2、同窓会ホームページの充実
充実した魅力ある情報をお届けできるように更新に努めます。

3、支部活動の支援
各支部の活動をより一層支援します。

4、本会60周年記念事業への協力
来年度の60周年記念事業に向けて実

行委員会及び学部と協議しながら取り組めます。

5、学内諸行事への支援
「卒業祝賀会」を支援します。また、退職者に記念品の贈呈を行います。

6、学術・文化活動への支援
農学部や各学科が行う学術・文化活動を支援します。

7、受験者増加への取組みに対する支援
「高等学校での出前講義」や「高等学校での説明会」に行くための旅費の支援を行います。

8、全学同窓会への協力
運営委員会への参加、カード入会事業の協力、大学との懇談会や全学交流会への参加、機関誌「雪華」の発送など他学部同窓会と足並みを揃えた活動を行います。

4、本会60周年記念事業への協力
来年度の60周年記念事業に向けて実

支部だより

◆北海道支部

本年度十六回目を迎える新潟大学農学部北海道同窓会は、十月二十日（土）～二十一日（日）にかけて、紅



葉が見頃となっていた、札幌市の定山溪温泉「定山溪ホテル」で開催しました。総会出席者は七名で内宿泊は六名でした。

開催案内は毎回九十通ほど出していますが、出席できない方からもハガキやメールなどで近況報告があり、総会で紹介しています。

総会では、成田会長の挨拶の後、五十嵐事務局長より平成二十四年度経過・会計報告、新潟市での同窓会常任幹事会報告、平成二十五年度事業・予算案について協議し、それぞれ承認されました。また、本年は役員改選の年であり、新役員についても決定しました。

総会に続く宴会では、坂本さんの乾杯の後、近況報告等を行い、二時間余り語り合いました。その後、部屋での二次会では、新潟の銘酒に舌鼓を打ちながら、なごやかなひとときを過ごしました。

翌日の朝は、少し疲れが残ってい

ましたが、温泉で疲れを癒し、それぞれ帰途につきました。

今回の同窓会は、平成二十五年秋頃、道北方面で開催することとしました。

佐藤 誠一（昭60農化）

◆秋田県支部

平成24年を振り返ってみますと、4月の爆弾低気圧による暴風は、パイプハウスの倒壊を中心に、県内の農業生産施設等に大きな被害をもたらしました。また、夏から秋にかけての猛暑・干ばつによる農作物被害、一転して秋には長雨により収穫できない大豆が多く発生するなど、農業にとっては厳しい年でありました。

早くも、今冬の大雪による雪害が心配されていますが、平成25年は良い年であってほしいと願うところで

す。さて、秋田県支部の総会は6月23日（土）に秋田キャッスルホテルで20人の出席のもとに開催されました。会の冒頭、これまで会長として支部の活動にご尽力いただいた大友捷一氏（昭39卒）が2月に急逝され



ため、在りし日を偲び、ご冥福をお祈りして黙祷を捧げました。

その後の役員改選では、新会長に副会長の小島武志（昭52卒）氏を、新副会長に幹事の佐藤誠洋（昭58卒）氏をそれぞれ選任し、新体制で支部の活動を盛り上げていくことを確認しました。

忘年会は12月1日（土）に19名出席のもとに開催され、支部の行事を

締めくくりました。近年は、若い世代の参加が定着してきていることから、出席者の年代が分散し、様々な話を聞けることは有意義であり、事務局としては今後もこの傾向が継続できればと思っております。

秋田県では、平成25年秋に「デスティネーションキャンペーン」が開催されます。これは、地方自治体及び地域の観光事業者等がJＲグループと連携して、対象エリアの集中的な宣伝を広域で実施することで、全国からの誘客を図ることを目的とする日本最大規模の観光キャンペーンです。キャッチコピーは「あきたにしました。」。みなさんもこの機会に秋田にいらしてみたいかがでしうか。

鈴木 善彦（平3農）

◆首都圏支部

平成24年度の総会を、6月8日（金）ホテル銀座ラフィナートで開催しました。来賓として、新村農学部長、鈴木首都圏同窓会長、上野東京イノベーションクラブ常任理事の3名をお招きしました。当日の出席者

は31名でした。

最初に、酒井仙吉氏（S46年畜産科卒）から「東大における教員選び―大学と社会の違い―」という演題で講演をして頂きました。先生は、新潟大学卒業後、修士・博士課程を東大で修了されて、1978年東大助手を皮切りに、2011年東大教授を退官されるまで東大に在籍した経験をお持ちです。東大は研究者の養成が中心で、その点が教員選考で重視されることでした。以下に東大の教員が求められることを記しておきます。

（成果が求められる研究者）

- (1) 論文の質と論文数（第一の評価）
- (2) 学会賞と外部資金の獲得（第二の評価）
- (3) 結果の出やすい研究に集中（第三の評価）

三の評価

- (4) ゆとりを無くした若手研究者（任期制）

講演の次に総会に移り、平成23年度活動報告及び会計報告・会計監査報告があり、原案の通り承認されました。その後、記念撮影をした後、懇親会に移りました。

懇親会の初めに、新村農学部長及

び鈴木首都圏同窓会長からご挨拶を頂き、金子前農学部同窓会長の音頭で乾杯した後、来賓・同窓生入り乱れて懇親を深めました。今年もS25年卒の山本さんから、平成22年卒の橋本君まで幅広い世代が集まりましたが、平成二桁世代は昨年よりもやや少なめでした。

今年は、人文・法・経済学部同窓会幹事の石黒さんが出席をしてくれました。他学部同窓会の活動ぶりを知ることができたそうです。そして、初参加の方からは一言お話をさせて頂きました。最後にS31年卒の土屋さんの音頭で、全員で、「四季の新潟」を歌って閉会となりました。

佐藤 純一

（昭47農化）



◆福島県支部

今年も、十二月の吾妻の連山は、くつきりと白雪に輝いて見えます。

昨年3・11の東日本大震災の影響が、未曾有の被害をもたらしました。福島は、あれから間もなく二年目を迎えようとしている現在、福島第一原発事故など震災復興の足音には、乱れた状態が続いたままです。

福島支部活動も、160名会員の60%の方々が県職員で、過日、事務局長・沢田吉男さんを訪ねた時も、



職場が「農林水産部農林地再生対策室、室長」に移り、更に多忙な状況でした。残念ながら支部活動は休止の状態です。

福島第一原発事故に伴う除染土などを保管する中間貯蔵施設について、県知事は環境省が求めている現地調査の受け入れを表明し、建設へ向け動き出します。原発廃炉に向けて一歩踏み出しました。今後、40年も先の原発廃炉の道程は未知のままです。福島市では、各家庭の除染に対する同意書とアンケートの提出を求め、各家庭の除染土は家庭毎に貯蔵するのです。一方、大熊町では、帰宅困難地区となり、故郷の地を離れた人々には、更に苦難が続きます。この状況の中、スペイン・ポルトガルの旅をして来ました。バスの中で、ガイドの説明によれば、昨年3・11の福島第一原発事故当時に、政府関係者の解説には即避難。ブラジルへの日本国民大移動の方法を指摘していた、というのです。福島市では、北海道夕張への避難の話が飛び交い、実際には、山形はじめ全国に避難を続けている状況にあり、仮設住宅避難もそのまます。

福島は、どこに向かうとしているのか。毎日通う橘高校弓道場で、女子生徒が「放射能の被曝・オールボデिकाウンターを受診してきました」という。言葉を失いました。

高久 英昭（昭32農）

◆長野県支部

同窓会長長野県支部定期総会を平成24年9月2日に、松本駅近くの「ホテルモントーニユ松本」にて開催しました。常連参加者の多くは県北部の長野市及び周辺に在住し

ており、主に長野市で開催してきました。長野県は南北に長く、中南部在住者の便宜と新たな参加者を募るため、最近では会場を長野市と県中部の松本市を交互にしています。まだ、参加者数が飛躍的に増加していませんが、諏訪地方在住の女性の参加もあり、新規参加者の獲得に少しずつ効果が現われてきました。今回は、男性12名、女性1名計13名の参加でした。

総会では、協議事項の他に、本部や各方面で活躍する同窓生を招い



て、講演をお願いしています。今回は、今井寛氏（19回卒・農）にコスタリカ共和国でのシニアボランティア体験を報告していただきました。多少の身の危険を感じつつ海外協力を展開されたご苦労ややり甲斐も含めて、実際の体験を聞くことができました。

講演終了後は、恒例の懇親会に移行します。参加者の近況報告を話題とした全員での放談会に加え、今回の懇親会では、最も年輩の市川基氏（10回卒・林）から、退職後に腕を磨

いたマジックのショーをご披露いただきました。開会時間の相前に早くから、参加者に気づかれぬように「たね」を仕込んだものと推察しています。アンコールの声も多く出て、近年になく盛り上がりしました。

最後に学生歌を歌って終わりました。新潟を離れて相当の年数が経過した者も多いのですが、「四季の新潟」等の懐かしい歌に接することで、それぞれに第二の故郷を思い出すことができます。ただ、残念なことに年数の経過に伴い、メロディーの正確さに若干の不安があることは致し方無いと思われます。

50代、60代以上の参加者が多い傾向は続いています。それぞれの立場で思い思いの発言をし、また、その発言を互いに受け入れて、独特の自由な時間が流れています。20代、30代の若い同窓生、まだ、一度も参加したことのない同窓生の方も、一度参加され、独特の世界に接して見ると、思わぬ楽しい時間を持つことができるかもしれません。多数の皆様参加を期待して止みません。

増野 和彦（昭57林学）

◆新潟県支部

早いもので、県内でも年に1回くらい顔を合わせる機会が欲しいとの先輩同窓生の声を受け、新潟県支部が結成されてから1年が過ぎました。

第2回支部会については、昨年11月27日に農学部同窓会が当番となる平成24年度全学同窓会交流会が開催されたこと、又今年6月には農学部創立60周年記念行事が企画されていることから単独での開催を断念し、全学交流会の機会をそれと読み替えることとし支部だよりで参加者を募りました。お陰様で、これまで全学交流会には農学部からの出席者が1桁に過ぎず寂しかったようなのです



が、この度は約30名もの参加を頂き、4卓のテーブルが確保でき、当番同窓会としてのメンツが立ったと会長や学部長からお褒めを頂いたところです。

県内には2、700名を超す同窓生が居ることを考えると、まだまだ参加者数が少なく物足りないところではありますが、口コミや「松涛」などの広報ツールを使って、徐々に参加者を増やし、期待される楽しい支部活動にしていければと思っています。

第3回の企画は60周年記念が終わってからになるとありますが、「大学との交流」「懐かしさの共有」「新しい出会い」「同窓としての絆を深める場面の創出」などを意識して、開催時期や周知の方法なども工夫していきたいと考えています。

います。

皆様からのご意見、ご要望などもどしどし同窓会事務局までお寄せください。

渡辺 仁（昭52農工）

◆富山県支部

富山県支部では、平成24年7月20日（金）、富山市内の「とやま自遊館」において、会員36名参加のもと、平成24年度総会及び懇親会を盛大に開催しました。また、来賓として農学部生産環境科学科の中野和弘先生をお招きしました。

総会では、林靖夫支部長の挨拶の後、中野先生より、大学の近況や農学部動きについて報告いただき、最近の農学部の動向に思いをめぐらせたところです。また、支部の顧問である中山敏明先輩が、春の叙勲において栄えある瑞宝小綬章を受章され、中山先輩からは、今後の抱負を力強く述べていただきました。今後の益々のご活躍と今後とも当支部に対しご指導をいただくことを願い、会員一同、大きな拍手でお祝いを表した次第です。



また、夏の暑い時期にもか
かわらず、日本酒を飲む方が
多く、さすが、酒どころ新潟
で青春を過ごしただけはある
と思いました。懇親会の締め
として、恒例の「農学部学生
歌」と「四季の新潟」を全員
で合唱し、盛会のうちに終え
ることができました。

最近、新入会員が少なく、
寂しい思いもありますが、年1
回だけでも顔合わせすること
は意義のあることと思いま
す。会員の皆さんには、また
ご案内いたしますので、多数
の参加をお待ちしておりま
す。

森松 亮（昭56林）

◆ 福井県支部

懇親会では、県内の農林業に関す
る課題である富山米のブランド化は
もとより、園芸振興やイノシシ被害
対策、豊富な農業用水を活用した小
水力発電、水と緑の森づくり税を活
用した県民参加の森づくり等々、大
いに意見交換をしたところです。

福井県支部は、平成24年11月28日
（水）に、総会を開催いたしました。急
な案内にも関わらず、12名の会員か
駆けつけてくださいました。今年は、
若い方が参加しやすいよう、また本
会からいた、だく助成金を有効に使う
べく、会費を半額にして開催しまし

た。

橋本孝一会長の挨拶に続いて、朝
日泰蔵事務局長より会計報告をして
いただき、最後に明間から同窓会常
任幹事会の報告をいたしました。

長引く不況の中にあつても、相変
わらずの高い就職率を誇っているこ
と、耐震工事のこと、記念行事のこ
となど大学の近況をお伝えしまし
た。

続いて懇親会が盛大に開催されま
した。

福井支部では、お酒で舌の回転が
良くなってきたところで、参加者全
員が順に名前と近況を紹介するのが
習わしです。

実は私はこれが大の苦手なので、
順番が近づくと頃には食べるのも忘れ
て猛スピードでネタを考えていま
す。

記念撮影を終え、しばし歓談のあ
と、これも恒例の学生歌を歌って締
めとなります。学生時代にこの歌を
口ずさんだ覚えが無い世代が増え、
また、ほどよくお酒も入っているた
め、非常に危なっかしい音程で歌い
終えると、万歳三唱でお開きとなり
ました。学生歌のCDを作られると

のことで、かなり期待しております。
今回残念ながら参加できなかった
福井支部の皆さん、好評だった会費
半額を来年もやりますので、次も盛
り上がりましょう！

明間 基生（平5畜産）



職場紹介

朝日酒造株式会社

本間 一郎 (平13 応生)

●会社概要

弊社は、天保元年（1830年）に現在地（旧越路町）に久保田屋として酒造業を創業しました。「品質第一」を家訓に、朝日神社境内から湧き出る「宝水」で醸したそのお酒はすっきりと芳醇な酒質で、四季折々に村人をいやすお酒として愛されていました。その後、信濃川の水運を利用し



朝日酒造外観

て販路も次第に拡大。明治後期には「朝日山」の名前で売られるようになり、良いお酒を求めて懸命な酒質の向上を図ってまいりました。品評会でも高い評価を得て、大正4年（1915年）には大典礼酒に選ばれるなど、常に高い評価を得てまいりました。大正9年（1920年）に朝日酒造株式会社となり、現在のわたしたちの原型が確立しました。

●酒造りは米づくり

「酒の品質は、原料の品質をこえられない」これは、かつて蔵の杜氏が言った言葉です。日本酒の香りや旨みに大きく影響を及ぼす米。この酒米の品質向上や、新しい酒米の育成などを推進するために、平成3年（1991年）より、地元の農家の皆さんや当社の関連会社、農業生産法人「有限会社あさひ農研」と連携し、酒造りにとって最良の品質をもった米づくりをおこなっています。

●社会貢献活動

弊社の経営理念は「我が社の経営目的は我が社の社会的存在価値を高めることである」と示されています。

この理念に基づき「品質第一」の商品を市場に提供することほもちろんのこと、社会貢献活動もおこなっています。きれいな空気・水循環の指標として「ホテルの保護活動」を、地域の美しい景観を醸成するために「もみじの里づくり」などをおこなっています。その他、弊社のエントランスホールを利用したコンサートや国登録有形文化財である松籟閣を使用したお茶会、寄席など様々な活動をおこなっています。



朝日酒造農学部出身者

●弊社新潟大学農学部出身者

弊社社員182人中、農学部出身者は9名（女性2名）います。年齢層も20代〜60代と幅広くなっています。職種も様々で、製造・研究系に6名、ボトリング系に2名、営業系に1名配属されています。また、管理職も3名おり、農学部出身者が弊社で重要なポストにつき日々、精進しています。

●最後に

新潟清酒といったら朝日酒造のお酒といわれるように、がんばってまいります。皆様も何かの折に弊社のお酒をご賞味いただけますと幸いです。

弊社情報にご興味をもたれた方は弊社HP

(<http://www.asahi-shuzo.co.jp/>)をご覧下さい。



田んぼから見る朝日酒造

特集 東日本大震災のその後の取り組み

大震災からの復興に向けて

岩手県 畠 山 俊 行（昭58農）



被災直後（岩手野田）

平成23年3月11日午後2時46分に発生した東日本大震災は本県を始め、宮城・福島の子県に甚大な被害をもたらしました。被災3週間後、沿岸部の農地被害を確認する作業に同行し、内陸部との違いをまざまざと体感し、被害の甚大さを認識させ

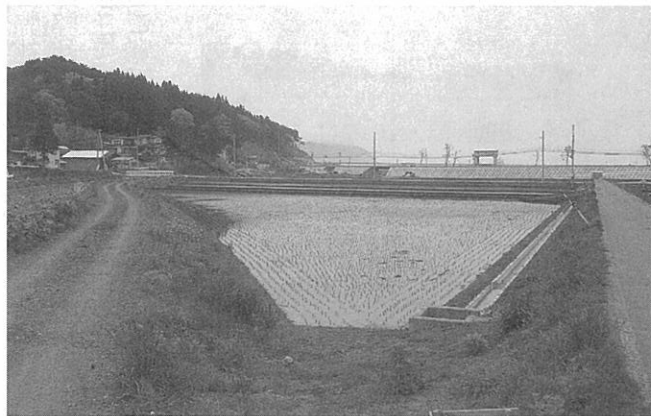
られました（道路と海岸を仕切っていた防潮林がなくなり、海岸線がほんの数mに迫った国道45号線。町並みが消え鉄骨だけが立つ市街地等々）。

当時は、旧専門技術員機能を担う農業改良普及組織の一員として、被災の影響を最小限に抑え農業者が意欲を持って営農活動できることに全県で取り組んでいました。そのため、作付可能となる農地や利用できる施設（用水等）の確認が最初の取り組みとなりました。沿岸部のほか、内陸部でも水田法面、ため池堤体崩れや圃場のひび割れという被害があり、農地被害面積は1946haで県全体の農業被害の9割を占めました（そのうち4割が沿岸部）。内陸部には栽培管理技術の周知を徹底し、沿岸では除塩による津波被害の回復を推進しました。その結果、沿岸部で

作付けした地域では平年並みの収量を確保するとともに、次年度の農地復旧後の作付推進に弾みがつきました。平成24年春には農地復旧事業により沿岸部で103haが営農再開されています（沿岸部復旧予定農地の15%で、沿岸南部で作業が進んでいないのが実態です）。

被災直後は問題とならなかった「東京電力福島第1原子力発電所」事故に由来する放射性物質への対応は、全く雲をつかむような内容であり、福島県の対応を参考としながら取り組んだ形です。本県では、放射性物質の影響対策として、消費者に安心して県産農産物を利用してもらうため、放射性物質の影響防止する生産管理対策と、検査計画に基づく放射性物質濃度検査に取り組んでいます。

放射性物質の影響を最も受けたものは本県農業の核である「畜産」でした。自給粗飼料を活用した低コストな体系を推進しているため、暫定基準値を超えて利用自粛となった牧草地の除染作業が必要となり、対象の半数まで着手しています（H23産牧草検査により、県全体で約15千haが対象）。また、牛の移動制限（牛肉中



復旧後

の放射性物質濃度推定を含む）や牛肉の全頭検査など、被災前と異なる環境が続いています。

放射性物質濃度が国の定める基準値未満であれば流通できますが、全ての食品がゼロか検出限界値未満であることが求められている風潮と感じます。前号の松涛で、JA全農福島の方が寄稿した「安全な農産物を生産します（流通します）」ので、放射性物質を正しく理解して、冷静な対応をお願いします」が被災地の願いだと思います。

昨年4月から県北沿岸部の久慈市

で勤務しています。本県沿岸部は、農業基盤が脆弱なことから半農半Xで地域が成り立ってきました。水産業や林業などの一次産業、それを加工する二次産業も復旧しなければ復興につながないと、県をあげて取り組みんでいるところです。特に、他県から派遣職員として応援いただきたい

しいたけトップ産地を目指して!!

J A 全農福島 郡山営農事業所 園芸センター

手代木 丈 幸 (平24農生)

私は、2012年の春に新潟大学を卒業し、現在は福島県郡山市にある郡山園芸センターで働いています。ここではおもに、農家の方が生産した農産物をパッケージングし、市場に出荷する、という仕事をしています。当センターには、季節によりその時期その時期の旬の野菜・果物が入荷されます。とくに夏場の時期には、アスパラガス・きゅうり・トマトなど、さまざまな品目の農産物で現場が非常に賑やかになります。

そんな当センターの中ですが、周年を通して出荷している主要な品目として、しいたけがあります。

ている方々には、農地・漁港などの基盤整備に貢献いただいております。

最後に、これまで本県に対してご支援・ご協力いただいたことに心より感謝申し上げ、報告とさせていただきます。

当センターにはほぼ毎日、農家の方々が生産してくれた採りたてのしいたけが入荷されてきます。生産者の中には、当センターに直接しいたけを持ち込んでくださる方もおり、そうした方々と直接関わることが出来るというのは私にとって非常に貴重な経験になっています。

しいたけが出荷のピークを迎える秋には、当センターにある2つの冷蔵庫は、しいたけが入ったコンテナで一杯になります。10月の繁忙期には、ほぼ毎日しいたけのパッケージ作業が行われ、しいたけに囲まれないから日々の業務を行っています。そんな福島県のしいたけですが、

東日本大震災以降、放射能による風評被害に苦しめられていることは確かです。震災以前と比較すると、販売重量・販売単価ともに大きく減少しており、重量で6割程度、単価では8割程度にとどまっています。地震から1年以上経った今でも、風評は根強く残っており、福島県産というだけで疎遠する方がいることも事実だと思います。

しかしそんな状況だからこそ、当センターではしいたけの放射能モニタリング検査には大きな力をいれています。当センターでは、ほぼ毎日、さまざまな品目の農産物に関して放射能モニタリング検査を実施しており、しいたけについても生産者ごとに検体を採取し、検査を行っております。

しいたけをミキサーにかけ、カプセルに詰めるという地道な作業ではありますが、こうした地道な作業から得られたデータ・結果の積み重ねが、いつか大きな成果に繋がるのではないかと考えております。

風評被害という先が見えない問題に直面している当県ですが、末端の消費者の方々からの信頼を得る為には、こうした地道な作業は継続して

いかなければならないことだと感じます。しかし、いくら検査を重ねても、県産の農産物が「安全」であると言っても、消費者の方々が「安心」であると感じなければ購買には結びつきません。いかに「安全であること」をPRし、それを「安心」に繋げていくのか、そうした点が当県の課題の一つであると考えます。

現在、風評が続く当県ですが、いつか「こんなに検査しているところは他には無い! 福島県産なら安全・安心だろう!」と言われる日が来るように、日々の検査業務・データ収集にはとくに力を入れていきたいと考えます。



特集 トキをめぐる話題'12

箕口秀夫(昭57林学)

2012年はトキの野生復帰の道
のりにおいて忘れられない年となり
ました。1976年(昭和51年)以
来、36年ぶりに野生下でヒナが誕生
し、さらに1974年(昭和49年)
以来38年ぶりにそのヒナが無事巣
立つたからです。2008年に27年
ぶり(当時)に佐渡の上空に10羽の
トキが放たれてから、今日までの道
のりは決して平坦ではありませんで
した。2009年の繁殖期には先の
放鳥個体のうちメスがすべて本州に
渡ってしまい(「表紙写真に寄せて」
参照)、当然のことながらペアが形成
されませんでした。2010年には
6ペアが形成され、5ペアで産卵が
確認されましたが、孵化は確認され
ませんでした。2011年には7ペ
アが形成されてすべてのペアで産卵
が確認されましたが、孵化は確認さ
れず、結局すべてのペアが抱卵を放
棄してしまいました。そして、ペア
が形成されはじめて3年目となる2
012年には、18ペアが形成され、
すべてのペアで産卵が確認されまし

た。そのうち、3ペアで孵化が確認
され、確認された8羽のヒナすべて
が巣立ちしました。今はすでに自立
し、佐渡島内の群れの中で生活を
しています。

2013年2月1日現在(以下、
同様に2月1日現在の資料)、野生下
で生存しているトキは若鳥8羽を含
めて75羽です(佐渡に74羽、本州に
1羽)。これまで7回、108羽のト
キを放鳥しています。このうち生存
が確認されているのは67羽で、行方
不明扱い(6カ月以上未確認)3羽、
死亡扱い(12カ月以上未確認)31羽、
死亡(死体確認)5羽、そして保護・
収容2羽となっており、生存率は62
%となります。

一方、飼育下では、佐渡市の佐渡
トキ保護センターや野生復帰ステ
ーションを中心に、多摩動物公園、い
しかわ動物園、出雲トキ分散飼育セ
ンター、及び長岡市トキ分散飼育セ
ンターの分散飼育地も含め、182
羽のトキが飼育されています。その
うち平成24年生まれの個体は50羽で

す。

また、2012年秋にトキの戸籍
が大きく変更されました。日本鳥学
会は改訂した「日本鳥類目録」の第
7版においてトキ科とサギ科をコウ
ノトリ目からペリカン目に変更しま
した。米国の研究チームによるDNA
分析の結果を踏まえたものです。
トキとコウノトリ、どちらも日本を
代表する自然再生のシンボルです
が、親戚筋ではなかったようです。

トキが野生復帰、定着するために
は、当然、他の生き物との関係を考
慮しなければなりません。トキが住
める環境を確保、創出することで、
おのずから他の多くの種の生き物の
存在が確保されるアンブレラ種であ
るトキにとって餌環境は重要な問題
です。放鳥されたトキの採餌行動を
地道に追跡することで、次第にトキ
の餌メニューが明らかになってきて
います(新潟大学朱鷺・自然再生学
研究センター永田尚志氏私信)。それ
によると、トキの餌メニューは非常
に多岐にわたっていますが、なかで
もドジョウ、ミミズおよびカエル類
は好物のようです。これらのトキの
餌となるカエル類の研究過程におい
て、佐渡島には2種類のツチガエル
が生息し、うち1種が2012年に
新種の「サドガエル」として記載さ

れました。もちろん、トキはこの新
種のカエルも好んで食べているよう
です。

表紙写真に寄せて

新潟大学朱鷺・自然再生学研究センター

中津 弘

メスのトキ(No.03)。海峡を越えて
帰り着いた佐渡の風景は、その目に
どう映ったでしょうか。

この個体は、2008年秋の試験
放鳥で佐渡の空に飛び立った直後か
ら、1年余りにわたって、上越や新
潟などを転々としていました。
ひよつこり佐渡に戻ってきたのは2
010年の春先。長期間の単独行の
せいで他の個体となじめないのか、
群れに入るのに2、3ヶ月を要しま
した。島内で群れ生活が続ける他の
個体と比べると、No.03の素行はすい
ぶんと風変わりな思えましたが、そ
の後この個体は繁殖期が来るたびに
パートナーと一緒に巣作りをし、抱
卵をするのが観察されています(こ
の個体の卵の孵化はまだ確認されて
いません)。No.03は子育てがしたくて
佐渡に帰ってきたようです。
いまNo.03は、3度目の繁殖期を迎
えています。

ベントリー 同窓生からのたより

野菜作り

帆刈 美弥子 (昭58農化)



改めて数えてみたら、大学を卒業して長い年月が経っていたのだと驚いてしまいました。

現在は、小学校に教員として働いています。気がつくと定年退職までもカウントダウンに入っていました。小学校では全教科を教えますが、1、2年生を担任すると、理科や社会の代わりとして生活科を教えます。この生活科では、花や野菜を育てる学習内容があります。私は家に畑をもたないので、この学習がちょっとした楽しみになっています。

学校の事情によって、野菜を育てる畑は様々です。広い肥沃な畑であつたり、花壇のようにブロックで囲われた小さな畑であつたりします。また、鉢に自分の育てたい野菜を植える場合もあります。今勤務している学校では、土のよくない狭い花壇しかなかったのですが、今年は一鉢一鉢で、育てたい野菜の苗を植えます。

した。育てる際には地元J Aの方や地域の農家の方から、「野菜の先生」と呼んで教えてもらったり、

手伝ってもらったりします。なかには、子どもの野菜を枯らしてはいけないと、職員よりも、子どもたちよりも畑に日参して世話をしてくださる方もいるのです。

今年も子どもたちと一緒に、ささやかながら野菜作りに取り組みました。しかし、思ったほどの収穫を上げることができませんでした。(やっぱり土が悪かったのか、それとも今年は不順な気候だったからかな、猛暑だったし……)と原因を考えてみますが、熱心さが足りなかったのが本当の原因なのでしょう。4年ぶりの今年の野菜作りは終わりました。次、2年生を受け持つので、楽しみはちよつとお休みです。

教師冥利

柴宮 秀生 (平8林)

① 近況報告

新発田農業高校に勤務しています。十一月に文化祭がありました。その時に隣にいた教員に親しげに話しかけてくる男子生徒、この生徒は福島県の農業高校から避難してきた生徒です。その高校に勤務していた農学科卒の友人から以前、学校で実

習ができずに困っている旨の連絡をもらいましたが、その後どうしているでしょうか。避難してきた生徒は元気に頑張っていますのでご心配なく。

授業は主に測量を担当しています。測量は器械の扱いが面倒で数字も多く出てくるので、生徒からは一発で嫌われます。それでも測量を勉強している生徒は、毎年数名が測量士補に合格してくれますし、一度だけ農業高校生が参加する平板測量競技会の全国大会にも出場できました。どうやっておもしろい授業をしようかという考えをしています。結果が形となつて現れるのが一番良いと思います。「課題研究」という授業で今までに取り組んだテーマの中で「地上絵の作成」と「校舎の模型作成」は、測量の理屈が分かりやすく結果を形で現わすことができました。で、良いテーマだったと思います。指導する時には、できるだけ生徒に責任を持たせ、途中で失敗しても最後には必ず結果に結びつくように気をつけています。これをうまくやるのが腕の見せ所かと……。

② 趣味、または熱中していること

イモリを飼っています。6年くらい生きています。長野に帰省した時に田んぼで見つけて取ってきました。去年は卵がかえり、生きたミジンコで幼生を育て、ついに上陸させることができました。イモリは上陸後森の中で数年間過ごし、三年くらいでまた田んぼに戻ってくるそうです。ご存じでしたか？田んぼの生き

物イモリは、実は森で成長していたのです。

③ 最近、感動したこと

卒業生が時々顔を出してくれました。驚くほど成長した姿を見せてくれる事が多く、その度に喜んで感動したりしています。新発田農業高校では二回卒業生を送り出しました。文化祭の時、昨年卒業した生徒とは同級会のような雰囲気になり、今の学校や会社、仲間の事などを話し、六年前の卒業生は夫婦で子どもを連れて来てくれました。いい仕事に就いたな、と感じています。

④ 大学、同窓会、学生の皆さんへのご意見、ご提言

今になつて思うと、大学でしか身につけることができないものがたくさんあると思います。年齢的にも大きく成長ができる時期ですので、学生の皆さん、いろいろなことに挑戦してください。そして、感謝の気持ちも忘れず

⑤ 次回に

執筆して頂く同窓生の紹介次も教員仲間です。が、廣瀬久人(旧性右田)さんをお願いしま



農工最後の 卒業生より

飯島 稔 (平8農工)



① 近況報告

長野県に本社があるミヤマ株式会社に就職して16年が過ぎました。環境創業企業として様々な分野に貢献している会社です。

私はその中で土壌汚染対策を行う部署にて全国の現場を飛び回っていました。

数千万円から数億円規模の仕事から客先営業&設計コンサルを行い、現場管理に入り検収を受けるというプレイングマネージャーを経験したことにより、「逃げることでできない責任」と「仕事が終わったときの充実感」を何度も味わせていただきました。

幾つかの部署を経験し、現在は上下水道処理設備の装置である高分子凝集剤連続溶解装置を製造管理しています。

② 趣味、または熱中していること
大学を辛うじて卒業させていただき長野へ戻り山の良さに気が付きました。北アルプスへ毎年テントを担いで登っています。

また、ゴルフ熱も再燃し庭にネットを張って練習しています。(年に何回もコースへ出れないのが難点)

③ 最近、感動したこと

韓国勢が強い中、石川遼が優勝したこと。

④ 大学、同窓会、学生の皆さんへ のご意見、ご提言

▽在籍中のみなさんへ

私は新人の採用に際して意見の言える立場になり、新人を育成する仕事もしております。

そこで、お勉強が出来なくても「工夫」「機転」「好奇心」の3Kを持っている人が大変魅力があり社会に出て伸びています。言われたことが出来るのは当たり前、常に2歩3歩先を考えて行動できる人になっていただきたいと思います。

▽同窓生の皆様へ

在籍中は破天荒な性格の私にお付合いただき誠にありがとうございました。私も1児の親となりどうか一般的な生活を送れるようになりました。40歳も過ぎると先の人生について考えるときがあります。

今のままの生活や仕事を続けていて何が待っているのか。そう思ったとき「農業」という言葉が浮かびました。

いつかは、安曇野で農家が出来るよう日々精進しております。その時が来ましたら皆様のご協力よろしく願っています。

⑤ 次回に執筆して頂く同窓生の紹介

次回執筆者は、私が在籍中に成人式に向けて床屋に行く費用が無く髪の毛を切つていただいた深沢氏にお願いしたいと思えます。(ちなみに成

人式での髪型はかなり不評でした。)最後になりますが、お世話になりました早川先生、中野先生に謝意を表させていただきます。

最後の林学科卒業生

前田 正人 (平6林)



大学を卒業し早や20年が過ぎようとしています。現在、私は福井県で林業職員として、また、4人の子供の父親

として日夜奮闘している所存でございます。これまで、あまり思い出すことも無かった新潟での出来事を、この場をお借りし振り返ることいたします。

まず、思い出すのは大学の入試の時です。「両親に行つてきます！」と声高らかに電車に乗り4時間半かけ、やっと新潟に着いたその時です。テレビのビフォーアフターではないですが「何と言うことでしよう」と叫んでしまったのは、今でも鮮明に思い出します。受験票を忘れたのです。次の日の受験の朝までに車をぶつ飛ばしてくれた両親に今でも頭が上がりません。

運よく合格したものの次に待っていたのは、下宿探しです。第1食堂に集結した沢山の皆さんの求愛を拒みつつ、射止めた下宿先は、五十

嵐一の町でありました。「一の町と言うからには大学に近いんだな」と気軽に考えていると、とんでもないところに連れて行かれ、私は5年間も西総合体育館の近くに住む羽目になったことは言うまでもありません。

その後、私を待ち構えていたのは、下宿の歓迎コンパでした。住民には新大以外に短大や専門学校の方もおられ、新大は目の仇状態で、乾杯の際には、何故か新大だけ日本酒をボールに波々に注がれ、一瞬で撃沈という、今でもありがたい記憶が甦ってきます。

私の大学生活は、このような「ほろ苦い」出来事からスタートしたのであります。そこから始まった在学5年間のエピソードにつきましては、今からゆっくり思い出し「笑いたい」と思いますので、紙面への掲載は割愛させていただきます。

今でも、林学科の先生をはじめ同期生の顔が浮かんできます。皆様におかれましては、全国各地でご活躍されていることと思います。また、いつかお会いしたいものです。

最後に、目を閉じればいつもあの頃の新潟の風景が甦ってきます。今、特に気になるのは、金子の豚カツ、ロッヂの生姜焼き定食、香蘭のウマニランチ、KUWATAのクワタラニチ、焼肉のミートパビリオン……まだ、やっているの。また、食べてみたいです。

第18回農学部フォーラムの開催

第18回農学部フォーラム実行委員長 高田良三

「新潟畜産の挑戦―飼料用米の利活用促進―」をテーマとして11月10日(土)に農学部大会議室において、学内外の80余名の参加を得て開催しました。まず「新潟県の畜産概要」として新潟県畜産課(玉木氏)から概要およびいくつかの取り組みの紹介があり、続いて第1部「生産についての話題」、第2部「飼料用米の利活用促進」の発表がありました。

第1部では、(1)「にいがた和牛」漆間平(にいがた和牛肥育名人)、(2)「安心安全ブランド農場、クリーンミルクの取り組み」吉田智佳子(新潟大農)、(3)「にいがた地鶏」原定幸(菅畑にいがた地鶏生産組合)、(4)「リキッドフィーディング」小嶋洋朗(キープクリーン)の4人の方から話題提供がありました。(1)では、村上牛を育てた道のりについての解説があり、さらに村上牛のおいしさ(一味違うおいしさの追求、特にジューシーさが特徴であることから多くの人に食べてほしい食材で

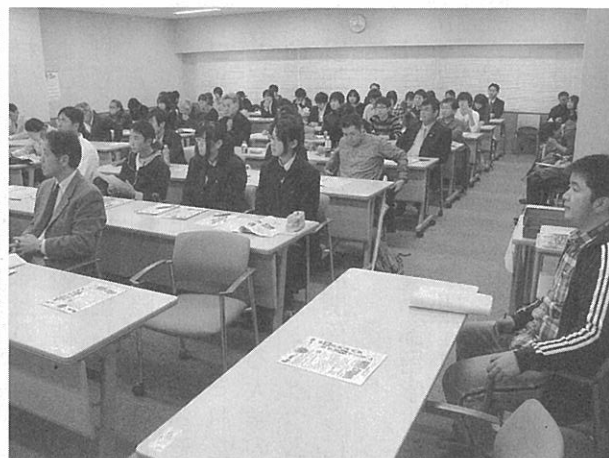
あるとのことでした。(2)では村松ステーションのクリーンミルク農場認定へのいきさつ、および牛乳のおいしさ、安全性、大学院生に対するミルクプロジェクトの取り組み等についての説明がありました。(3)では菅畑産にいがた地鶏(虎千代鶏)の生産および農村レストラン・すがばたけのオープンについて説明があり、現在注目されている六次産業化が実施されていることが示されました。(4)では養豚の新しい給与方法であるリキッドフィーディングを用いて、未利用資源(米菓の規格外品)の活用によるコストダウン(飼料費の軽減)についての取り組みが紹介されました。

第2部では「飼料用米の利活用促進」というテーマで、「養鶏」藤村忍(新潟大)、「養豚」高田良三(新潟大)、「乳牛」関誠(県農総研畜研センター)それぞれの畜種においての現在の飼料用米研究について発表がありました。いずれの畜種においても飼料用

米は十分に飼料としての価値のあることが報告されました。ブロイラーに飼料用米を給与すると肉の歯応えが良くなり、味にこくが出ることが示されました。離乳子豚に飼料用米を給与するとトウモロコシと比べて成長が改善され、下痢症状が軽減されたことが報告されました。乳用牛に対しては、乳生産に影響を及ぼすことなくトウモロコシ・大麦と25%飼料用米が代替できることが紹介されました。

総合討論では様々な内容についての討論が行われ、最後に参加者からの多くの質問に対して話題提供者がわかりやすく解説し、今後の新潟畜産の発展を期待して会を閉じました。

なお、11月14日付の新潟日報に農学部フォーラムの記事が掲載されました。



農学部での国際交流について

農学部国際交流委員会委員長 山田 宜永

今年度における農学部の国際交流の主な動きをご報告いたします。

今年度も、海外の多くの大学から新潟大学農学部と国際交流のための往来がありました。まず、特筆すべきこととして、平成24年7月の第4回農学部国際シンポジウム「アジアにおける現代農業と地域経済発展」が挙げられます。このシンポジウムは、農学部と大学院自然科学研究科の主催のもと、学術交流協定を締結している海外の大学を招聘する形式で開催するものであります。本シンポジウムは、アジア地域での食料生産と環境保全に関する最新の話題

を提供しあうことで、アジア規模での資源と環境問題への今後の展望を提起することを目的としています。さらに、学生に対しては、農業に関する最新の基礎科学や応用技術を習得させること、国際的な農業に関する現況、今後の課題および対応策を把握させることにも貢献しています。本年度のシンポジウムは中国の東北農業大学（ハルビン市）において開催されました。

海外からは、学術交流協定を締結している大学として、ボゴール農科大学（インドネシア）、モンゴル国立農業大学（モンゴル）、嶺南大学（中国）、自然資源大学（韓国）、チェンマイ大学（タイ）、中国農業大学（中国）およびキングモンクット工科大学（タイ）の6大学を招聘しました。また、寧夏大学（中国）中野和弘先生の担当大学と内モンゴル農業大学（中国）藤村忍先生の担当大学（中国）の2大学からの参加もあり、シンポジウム期間中の7月7日には、寧夏大学と学生交換交流を含む学術交流協定を締結するための調印を行いました。内モンゴル農業大学とは、今後の協定締結へ向けた打ち合わせを行いました。開会式では、Mei Xu



農学部留学生と指導教員との交歓会（平成24年11月、新潟大学第一食堂）

新の話題

東北農業大学 学長、

Zhiwei Qin

東北農業大学 副学長

および新村

末雄農学部

長の挨拶や

祝辞があり

ました。

Zhiwei Qin

先生は、新

潟大学農学部

に留学された

経験をも

ち、植物生産

学の分野に

おいて博士

号を取得され

ており、日本

語も流暢に

話されていま

した。期間中

の参加者は

総数270名で

あり、新潟大

学からは学生

30名、教員20

名の計50名

が参加しまし

た。なお、次

回は平成27

年にチェンマ

イ大学で開催

することになり



第4回農学部国際シンポジウムの開会式（平成24年7月、中国・東北農業大学）



寧夏大学との交流協定締結の調印式（平成24年7月、中国・東北農業大学）

このように国際化が進展する中、

10月16日には、世界経済フォーラム

（ダボス会議）副議長（前職 国連世

界食糧計画（WFP）事務局長）の

ジョゼット・シーラン女史が、第2

回食の新潟国際賞受賞のため来学さ

れ、全学講義「世界の食料問題と飢

餓撲滅運動―食の新潟国際賞を受賞

して」を開講されました。また、11

月9日にタイ・カセサート大学（長

谷川英夫先生の担当大学）と学生交

換交流を含む学術交流協定の締結の

調印が行われるとともに、9月にタ

イ・マヒドン大学の Kanvaratt

Supabulwatana 副学部長が、10月に

フランス・EAS (Ecole Supérieure

d' Agriculture d. Angers) の Emira

Mehinagic 博士が、12月に内モン

2011年度新潟大学農学部同窓会 事業費決算報告 (平成23年5月1日～平成24年4月30日)

1. 収入の部

(円)

科 目	予 算	決 算	増 減	備 考
基本収入からの繰入	3,160,000	3,160,000	0	
前年度繰越	1,213,242	1,213,242	0	
利子・雑収入	10,580	10,434	▲ 146	学部長祝儀 10,000(幹事会)、利息 434 合計 10,434
合 計	4,383,822	4,383,676	▲ 146	

2. 支出の部

(円)

科 目	予 算	決 算	増 減	備 考
1. 事務局費	500,000	478,305	▲ 21,695	全学交流会参加補助、消耗品、通信費、首都圏全学総会祝儀、謝金等
2. 会議費	450,000	452,955	2,955	常任幹事会開催経費、支部役員出席旅費等
3. 名簿情報維持管理費	60,000	58,800	▲ 1,200	名簿データメンテナンス
4. 卒業祝賀会費	700,000	700,000	0	
5. 退職者記念品費	35,000	31,500	▲ 3,500	定年退職者(教員2)
6. 嵐丘庭維持費	0	0	0	校舎改築中
7. 「松涛」発行費	1,400,000	1,222,290	▲ 177,710	「松涛」「しおり」印刷・郵送等
8. 慶弔費	50,000	38,392	▲ 11,608	弔電、生花等
9. 支部活動助成費	350,000	340,000	▲ 10,000	7支部(6支部 35,000円、首都圏支部 70,000円、首都圏全学総会開催支援 60,000円)
10. 学文活動助成費	100,000	110,800	10,800	3大学合同研修会、農学部国際シンポジウム補助
11. 全学同窓会負担金費	376,000	375,262	▲ 738	
12. ホームページ費	100,000	55,440	▲ 44,560	コンテンツメンテナンス
13. 出前講義旅費助成費	210,000	44,969	▲ 165,031	教員による高校等への出前授業等
14. 予備費	52,822	0	▲ 52,822	
合 計	4,383,822	3,908,713	▲ 475,109	

3. 差引残高 (A - B) 474,963円 次年度への繰越金

2012年度新潟大学農学部同窓会 事業会計予算 (平成24年5月1日～平成25年4月30日)

1. 収入の部

(円)

科 目	本年度予算	前年度決算	増 減	備 考
基本収入からの繰入	3,850,000	3,160,000	690,000	
前年度繰越	480,355	1,213,242	▲ 732,887	
利子・雑収入	645	10,434	▲ 9,789	
合 計	4,331,000	4,383,676	▲ 52,676	

2. 支出の部

(円)

科 目	本年度予算	前年度決算	増 減	備 考
1. 事務局費	500,000	478,305	21,695	役員会・通信・電話料・謝金等
2. 会議費	460,000	452,955	7,045	常任幹事会旅費等
3. 名簿情報維持管理費	60,000	58,800	1,200	名簿情報メンテナンス等経費
4. 卒業祝賀会費	700,000	700,000	0	卒業祝賀会費補助
5. 退職者記念品費	12,000	31,500	▲ 19,500	定年退職者(職員1)
6. 嵐丘庭維持費	0	0	0	農学部改修工事のため
7. 「松涛」発行費	1,300,000	1,222,290	77,710	「松涛」印刷・発送等、文字拡大、4ページ増
8. 慶弔費	50,000	38,392	11,608	弔電代等
9. 支部活動助成費	350,000	340,000	10,000	支部活動助成(6支部 @35,000、首都圏・新潟県 @70,000)
10. 学文活動助成費	200,000	110,800	89,200	生物防除国際シンポジウム研究者招聘旅費、農学部フォーラム等
11. 全学同窓会負担金費	376,000	375,262	738	分担金
12. ホームページ費	70,000	55,440	14,560	HPメンテナンス等経費
13. 出前講義旅費助成費	210,000	44,969	165,031	70,000円×3学科
14. 予備費	43,000	0	43,000	
合 計	4,331,000	3,908,713	422,287	

2011年度新潟大学農学部同窓会基金会計報告 (平成23年5月1日～平成24年4月30日)

1. 収入の部

(円)

科 目	前 年 度	今 年 度	増 減
繰越金	54,337,967	54,594,493	256,526
基金収入(入会金)	4,688,690	4,807,540	118,850
利子	93,994	73,245	▲ 20,749
合 計	59,120,651	59,475,278	354,627

2. 支出の部

(円)

科 目	金 額	備 考
事業費繰入	3,160,000	
新潟県支部立ち上げ及び60周年事業打合せ経費	532,703	
合 計	3,692,703	

3. 次年度への繰越金

(円)

科 目	金 額
収入合計	59,475,278
支出合計	3,692,703
繰 越 金	55,782,575

注) 2012年度は、60周年事業遂行のための経費が必要となった場合、基金から支出する。

学部だより

五十嵐太郎先生を 偲んで

和田 浩一（昭58農化）

平成24年6月4日、五十嵐太郎先生（肥料及び植物栄養学）が永眠なさいました。先生は、助手（昭和38年）、助教授（昭和52年）、教授（昭和61年）を歴任され、平成9年に定年退職されるまで、新潟大学農学部的发展に尽力されました。

私は昭和57年から3年間先生のご指導を受けました。五十嵐先生は当時より、お身体が万全ではないなか、精力的に研究をされていました。ヘビースモーカー、新潟言葉、浅黒いお顔という風貌から、失礼ながら大学教授と見破れる人は少なかったと思います。

研究に対しても無頼派と思いきや、綿密な文献調査、生物材料の丁寧な取り扱い、正確な分析技術など、細心な自然科学者の姿勢を崩されませんでした。農産物を研究対象とし

た1年サイクルの研究であるが故、長期研究計画が必要であること、日々の実験

において、チーム

ワークと段取りが大切であることを身を持って教えてくださりました。

社会に出て、先生の教えが身にしみた卒業生は多いことでしょう。

先生の植物栄養研究は、新潟県の農業、特に花き栽培での実践をゴールと考えておられました。後輩たちは、よく栽培地訪問にかりだされたと聞きましたが、実験室とフィールドワークがリンクしていく「農芸化学」の醍醐味を学生にも体験させたいと思われていたのかもしれない。

退官された後、先生の人柄を思わせる「はにかんだような笑顔」を拝見しに行けなかったことが悔やまれます。先生のご冥福をお祈り申し上げます。合掌。



新任教員紹介

農業生産科学科

助教 古澤 慎一



平成二十四年四月一日付けで着任いたしました古澤慎一（ふるさわしんいち）と申します。愛知県で生まれ育ちました。大学進学後、湖や雪にも囲まれた新潟で約十二年間、その後、東京で一年半過ごし、再び新潟でお世話になっております。

専門分野は農業経済学と開発経済学です。特に地域共有資源―誰のものでもない皆の地域資源―の持続的な維持管理のための社会経済的な条件について考えております。具体的には、新潟県内を主な対象に、農地・水・環境等の管理・保全問題に関して、非農家を含む地域住民の意識構造や合意形成の側面に着目した研究などを進めてきました。今後は、持続性を有する資源管理の一方策として、コミュニティ・ビジネス（社会的企業・事業）に着目した研究等も進めていきたいと思えます。まだまだ未熟者ではございます

が、本学の教育・研究に微力ながら貢献できるよう研鑽を積む所存です。ご指導ご鞭撻のほど宜しくお願い申し上げます。

生産環境科学科

准教授 坂田 寧代



平成二十四年四月一日付けにて着任いたしました坂田寧代（さかたやすよ）と申します。

専門は農村計画学です。これまでの研究では、平地の農業用水が暮らしの中でどのような役割を果たしてきたのかを明らかにし、農家だけでなく住民全体で担う農業用水の管理のあり方について考えてきました。また、中越地震で被災した錦鯉養殖用のため池の復旧状況を整理するとともに、養鯉池の立地変遷を水利利用技術との関連で捉えました。

前任地の石川県立大学から中越震災地域までは公共交通機関を乗り継いで長い時間を要していたので、今、公用車で一時間あれば行けることが夢のようです。少しずつフィールドを開拓しながら、新潟県の農村を学生とともに歩き回りたいと思います。どうぞよろしく願っています。

農学部 動向

学会賞等受賞

- 福山利範名誉教授（自然科学系フェロー）農業生産科学科（植物生産）北陸作物・育種学会賞「功労賞」24年7月「オオムギ・イネにおける耐病性、多収性育種の基礎研究および災害復興支援の研究による北陸地域への貢献」
- 楠原征治名誉教授（農業生産科学科（動物生産））日本家禽学会功労賞 24年9月
- 中野和弘教授（生産環境科学科）平成24年度農業情報学会学会賞（学術賞）平成24年5月「環境保全型農業のための支援アルゴリズムの開発に関する研究」
- 杉本華幸助教（応用生物化学科）日本農芸化学会関東支部2012年度大会若手奨励賞 2012年10月
- 吉田奈央 平成20年卒業・平成22年研究科修了（農業生産科学科・生命・食料科学専攻）第57回日本生殖医学会学術奨励賞受賞 平成24年11月
- 高松 進 昭和49年度卒業（農学科）日本菌学会賞 平成23年5月「うどんこ病菌の系統と進化に関する研究」
- 斎藤敬吾 平成21年度卒業 平成

23年度修了（生産環境科学科・自然科学研究科・環境科学）農業農村工学会京都支部 研究奨励賞 平成23年11月「波付き管水田魚道におけるドジョウウインターの適用」

○ 小原ひとみ 平成22年度卒業（生産環境科学科）農業農村工学会京都支部 研究奨励賞 平成24年11月「水質保全のための効率的な浄化用導水方法に関する研究」

○ 佐々木直美 平成22年度卒業（応用生物化学科）日本農芸化学会関東支部平成24年度大会若手奨励賞 平成24年10月

○ 清水 基樹 平成23年自然科学研究科入学（生命・食料科学専攻）第122回講演会日本育種学会優秀発表賞

○ 佐藤 努准教授 日本農芸化学会農芸化学奨励賞
○ 応用生物化学科畜産製造学研究室 2012 国際食品工業展で FOOMA AP賞（銅賞）24年6月

○ 佐藤技術専門職員 FC新通S 24年度大学農場技術賞 24年11月

○ 栗村美帆（農業生産科学科4年）第6回全農学生「酪農の夢」コンクールにおいて最優秀賞を受賞により学長表彰

学会等の開催

○ 第22回ドリコールおよびイソプレノイド研究会（平成24年9月29日）

新潟大学駅南キャンパス「ときめいと」、応用生物化学科、世話人・星野力、佐藤努、仲野千秋

○ 農業情報学会（平成24年5月16日）平成24年5月17日 東京大学農学部、大会委員長中野和弘教授、実行委員幹事大橋慎太郎助教、生産環境科学科

学位取得

○ 栗林 喬、平成12年度卒業、応用生物化学科、平成14年度研究科修了（生体機能専攻）博士（理学）・広島大学、平成24年9月

○ 長坂克彦、昭和63年農芸化学卒、平成2年研究科修士修了、博士（農学）平成24年3月

教員転任

岡島 毅准教授（農業生産科学科）が平成23年4月30日付けで酪農学園大学へ転任されました。

教員訃報

野並慶宣名誉教授（畜産製造学）が平成23年5月15日逝去。

五十嵐太郎元教授（応用生物化学科）が平成24年6月4日逝去。

西村米八元教授（育種学）が平成24年6月21日逝去。

上宮修清元助教（応用微生物学）が平成24年8月14日逝去。

謹んでご冥福をお祈りいたします。

会 員 訃 報

次の会員の訃報が事務局に届けられています。

- 矢代 晴久（昭46・3農学）
 - 長谷川周造（昭24・3農専・林科）
 - 森谷 順次（昭39・3農芸化）
 - 渡辺 鉄郎（昭23・3農専・農）
 - 田崎 峰夫（昭37・3林学）
 - 鈴木 国友（昭25・3農専・林科）
 - 山本 幸正（昭28・3農学）
 - 高野 正夫（昭48・3農芸化）
 - 土田恵一朗（昭30・3林学）
 - 牛腸 英夫（昭31・3林学）
 - 古沢 達男（昭30・3総農）
 - 本田 重夫（平成2・3農工）
 - 鈴木 澄郎（昭35・3総農）
 - 木村 博保（昭23・3農芸化）
 - 白井 昭（昭44・3農学）
 - 豊岡 義広（昭23・3農学）
 - 尾崎 三郎（昭31・3林学）
 - 山田 慶二（昭23・3農専・林科）
 - 渡辺 鉄郎（昭23・3農専・農科）
 - 峰岸 辰夫（昭23・3農専・農科）
 - 坂井 淳子（昭31・3総農）
 - 小林 端（昭29・3総農）
 - 山田潤一郎（昭23・3農専・林科）
 - 荒木 靖夫（昭32・3林学）
 - 藤田 昌男（昭26・3農専・農）
 - 出口ヨリ子（昭45・3農芸化）
 - 肥田 保久（昭29・3総農）
 - 佐藤 長幸（昭24・3農専・農）
 - 中西 豊二（昭25・3農専・農）
- 謹んでご冥福をお祈りいたします。

60周年記念事業について

箕口秀夫

農学部同窓会60周年記念行事の中核事業として、現在、農学部校舎の耐震補強工事にともない、樹木の伐採等の改変が行われた中庭(旧嵐丘庭)、前庭を一体的に新たな嵐丘庭として整備、再生する造成工事に取り組んでいます。新・嵐丘庭の造成・整備にあたっては「農学部らしさ」「帰属意識」そして「60周年+40年=100周年」をコンセプトとしていきます。農学部らしさは、いうまでもなく、緑の環境を創造する学部であることが一目でわかるような空間の創造です。帰属意識は、若い世代の同窓生に同窓会の一員であるという意識がなかなか醸成されない現状をふまえ、在校生の段階から同窓生、同窓会と縦横の繋がりをもてる場を提供します。具体的には、設計の段階から積極的に在学にも参加をしてもらっています。造成さらにはその維持管理作業を在校生と同窓生が協働して行える機会を設けていきます。そして、60周年+40年=100周年は、帰属意識とも重複しますが、嵐丘庭の再造成はあくまでも出発点にすぎず、植栽された木々の成長とともに同窓会が発展していくための時間を演出します。これらコンセプトのもと、前庭、中庭にそれぞれテーマを設けました。



前庭10年後予想図



中庭10年後予想図

●農学部の庭であることから、土を大切にす。葉が土に帰ることができ環境にだけ土を踏みつけられないように配慮する。新漧の木を使ったウッドデッキによる園路広場づくり。

マは「越後の森林(もり)」です。新漧大学周辺には森らしい森があまりなく、学生・教職員にとつて森はあまり身近なものではないように感じられます。前庭のある農学部前には図書館や総合教育研究棟があり学生や教職員が多く行き来します。そこで、その立地を活かし、普段植物に接する機会の少ない人たちが植えられた四季の植物を見て楽しむ、季節を感じ、新漧の自然の良さを感じられる庭にする。そのため、新漧の森林を代表する樹種を植栽し、越後の森を身近に感じてもらうます。

中庭のテーマは「Garden」人が集い、眺めて美しい庭です。学生・教職員が休憩をしたり、交流したりできる空間とします。そこで、人が自然と集まるようにシンボルとなる樹木を植栽、育てます。さらに農学部の校舎に囲まれていて、A棟、B棟、そしてC棟のいずれからも見ることができ、ため、どこから見ても華やかで美しい庭にします。

そして、実際の設計、施工を、同窓会員が関わる関連企業が協働して実施することとし、その代表を(株)グリーンシグマにお願いしました。造成に当たっては上記のコンセプト、テーマから以下の項目が意識されています。

- 樹木の根が丈夫に成長しやすく、多様な土壌生物も生息できる土壌環境をつくる。盛土、土壌改良、排水性の改良など。
- 新潟県内の樹木の分布は、暖温帯のタブやシイ、カシなどの常緑広葉樹も、冷温帯のブナやミズナラなどの落葉広葉樹もちようど混じり合っており分布している移行帯であることが一つの特徴である。その特徴を象徴的に表現した庭園とする。象徴的なタブの孤立木やブナの群落など。
- 時間とともに変化し成長する庭とする。樹木が成長できる空間の確保、土壌の改良、多様な昆虫などの生息環境の整備など。
- 教職員が快適にリフレッシュできる空間を提供する庭とする。安全快適なウッドデッキと木製ベンチなど。
- 植栽する樹木は農学部の歴史にとつて意味のある種類とする。研究の対象となつていくブナ、佐渡の演習林のなど天然スギの遺伝子を持ったスギ苗木などの植栽。
- 五十嵐砂丘の大地の記憶にある植物↓エノキ、クロマツ、カスミザクラなどの保存。
- エントランスのメイン通路や講義棟の上部階、屋上からの景観も配慮。森に囲まれた研究棟、快適な緑の空間と散策・休息のための園路広場のデザインを演出。

二〇一三年は農学部同窓会が設立六〇周年を迎えます。これまで実に八千人余の同窓生が巣立っていきました。人間でいえば還暦という大きな節目を迎えて記念事業がスタートしています。メインは、農学部の庭園「嵐丘庭」の整備です。学生、先生方、そして同窓生が多数在職する企業が一体となつて「今後の一〇〇年先を見据えた『越後の森』を創造する」という、農学部学生が構想した新しいコンセプトをベースに「嵐丘庭(前庭・中庭)」を造成する取組を進めています。

一昨年の東北地震の復興について、岩手、福島、宮城の同窓生から、復興への取組を寄稿していただき、時間が経たなければならぬものの、山積している中で、それぞれの立場で奮闘されていることに深く敬意を表します。未来を見据えた、百年後を見据えた復興を願っています。本年六月八日には、六〇周年記念式典が開催されます。多くの同窓生の再会と出会いの場となることを願っています。

新漧の美しい季節です。是非、新漧へ。

(H・W)



編集後記